

# 浮舟

泉鏡花

青空文庫



「浪花江の片葉の蘆の結ばれかかり——よいやさ。」  
と蹠踉として、

「これわいな。……いや、どっこいしょ。」

脱いで提げたる道中笠、一寸左手に持換えて、紺の風呂敷、桐油包、振分けの荷を  
両方、蝙蝠の憑物めかいて、振落しそうに掛けた肩を、自棄に前に突いて最一つ蹠踉け  
る。

「……解けてほぐれて逢う事もか。何を言やがる。……此方あ可い加減に溶けそうだ。……  
まつにかいあるヤンレ夏の雨、かい……とおいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松は一樹、一本、薄い枝に、濃い梢に、一ツずつ、翠、  
淡紅色、絵のような、旅館、別荘の窓灯を掛連ね、松露が恋に身を焦す、紅提灯ちらほ  
らと、家と家との間を透く、白砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葭簀も  
青薄、婦の姿もほのめいて、穗に出て招く風情あり。此処は二見の浦づたい。

真夏の夜の暗闇である。この四五日、引続く暑さと云うは、日中は硝子を焼くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕風とともに曇よりと、水も空も疲れたように、ぐったりと雲がだらけて、煤色の飴の如く粘々と搔曇つて、日が暮れると墨を流し、海の波は漆を舐らす。これでいて今夜も降るまい。癖に成つて、一雫の風を誘う潮の香もないのであつた。

男は草鞋穿、脚絆の両脚、しやんとして、恰も一本の杭の如く、松を仰いで、立ち止まつて、……眈を返して波を視た。

「ああ、唄じやねえが、一雨欲しいぜ……」  
俄然として額を叩いて、

「慌てまい。六ちゃん、いや、ちゃんと云う柄じやねえ。六公、六でなし、六印、月六斎でいやあがら。はははは。」

肩を刻んで苦笑いして、またふらふらと砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

その時躓く。……

「これわいな！ 慌てまいとはこの事だ。はあ、松の根ツ子か。この、何でもせい。」

岸辺の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。もやいぶね。——六蔵は投遣りに振った笠を手許に引いて、かがみこし 屈腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、かい 櫂もなくろ 艫もなしに、浜松の幹に繫いで、一棟、三階立は淡路屋と云う宏壯な大旅館、一軒は当国松坂の富豪、池川の別荘、清酒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の両の間、表通りへぬけみち 抜路の浜口に、波打際に引上げてあつた。

夫女巖へ行くものの、通りがかりの街道から、この模様を視めたら、それも名所の数には洩れまい。ふなぼたぼら 舫にへさぎ 鯉は飛ばないでも、舳に蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思われ。……が藍を流した池のような浦の波は、風の時も、渚に近いこの船底を洗いはせぬ。たわむれ 戯にともづなの舫を解いて、木馬のかわりにぐらぐらと動かしても、縦横に揺れこそすれ、すばし 洲走りに砂をすべ 漕つて、水に攫われるような憂はない。

気の軽い、のん気な船は、件くだんの別荘の、世に隔てを置かぬ、ただ夕顔の杖ばかり、四ツ目に結つた竹垣の一重を隔てた。ぬれえんごし 濡縁越の座敷から聞え来る三味線の節の小唄の、二葉ふたは三葉、松の葉に軽く支えられて、流れもあえず、絹のような砂の上に漂っているのである。

「この何でもせい。……住吉の岸辺の茶屋に、よいやさ。」

と風体、恰好、役雑なものに名まで似た、因果小僧とも言いそうな這奴六蔵は、その舩に腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよツ面倒だ。宿銭は鏹でお定り、それ、」

と笠を、すぼりと落とし、次手に振分の荷を取つて、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどんどん湧いている、障子もこの頃はりかえて、畳もこの頃かえてある。——嘘を吐きやあがれ。」

空手を組んで、四辺を見たが、がツくりと首を振つて、

「待てよ……青天井が黒光りだ。電は些と気が無えがね、二見ヶ浦は千畳敷、浜の砂は金銀……だろう、そうだろそうだろ然うである。成程どんどん湧いていら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。ああ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦の下の、壁の裡へ入つてやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下も二階もこの温気に、夕風の潮を避け、南う

けに座を移して、伊勢三郎が物見松に、月もあらば盗むべく、神路山、朝熊嶽、五十鈴川、宮川の風にこがれているらしい。ものの氣勢も人声も、街道向は賑かに、裏手には湯殿の電燈の小暗きさえ、燈は海に遠かつた。

六蔵ニヤニヤと独笑して、

「お寝間のお伽もまけにしてと——姉さん、真個かい、洒落だぜ洒落だぜ洒落じやねえ。入らつしやい、お一方、お泊でございますよ。へい、お早いお着様で、難有う存じます。これ、御濯足の水を早くよ。あいあい、とおいでなざる。白地の手拭、紅い襷たすきよ……柔な指で水と来りや、俺あ盥で金魚に化けるぜ。金魚うや、金魚う。」  
と可い気な売声。

「はてな、紺がすりに、紺の脚絆、おかしな色の金魚だぜ。畜生め、鯰なますじやねえか。匆ねる処は鮒やつだ奴やつさ。鮒だ、鮒だ、鮒ふなぎ侍むれえだ。」

と胸を揺つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、

「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違いにまた右で。燈は遠し、手探りを、何の気もなく草鞋を解いて、びたりと揃えて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の畳んで持ったを

スイと解き、足の埃をはたはたと払って、臀いしきで楫かじを取って、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案内引あいあい……」

と自分で喚わめき、

「奥の離座敷はなれざしきだよ、……船の間——とおいでなすった。ああ、佳いい見晴みはらし、と言いいてえが、暗くツて薩張さつぱり分らねえ。」

勝手な事を吐ほくうちに、船の中で胡坐あぐらに成った。が兔うさぎが櫂かいを押さないばかり、狸ねこが乗った形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留やめだ。こう見えても余り水心のある方じやねえ。はははは、湯に水心も可笑おかしいが、どんどん湧わいてるは海だろう。——すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分わったか。脱落ぬかりもあるめえが、何なにぞ一品ひとしな、別の肴を見繕つくろってよ、と仰せられる。」

と仰せられ、

「ああ、いい酒だぜ、忠兵衛のおふくろかい、古い所で……妙みょう爛らん妙爛。」

と二つばかり額を叩く。……暢気のんきさも傍若無ぼうじゃくぶじん人で、いずれ野宿の、ここに寝ねてしままうつもりでいよう。舩船を旅籠とより、名所を座敷にしたようなことを吐ぬかす。が。僅わずか一ひ



ととき  
時ばかり前、この町通り、両側の旅籠の前を、うろついて歩いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾ただよつた、見るからみじめな様子であつた。

## 三

たそがれ  
黄昏たそがれに、御泊おとまりを待つ宿引女やどひきおんなの、廂ひさしはずれの床几しょうぎに掛けて、島田、円鬚まるまげ、銀杏ちやうがえし返なで、撫つけ髪なでの夕化粧ななめ、姿を斜ななめに腰を掛けて、浅葱あさぎに、白なまめに、紅なまめに、ちらちら手絡てがらの色に通う、団扇うちわの絵を動かす状さま、もの言う声も媚なまめかしく傾城町けいせいまちの風情がある。

浦づたいなる掃いたような白い道は、両側に軒を並べた、家居いえいの中を、あの注連しめを張つた岩に続く……、松の蒔絵まきえの貝の一筋道。

こおりみせ  
氷店ゆきざき、休茶屋やすみぢや、赤福売る店、一膳めし、就なかんずく中ひよどり、鴨ひあしの鳴くように、けたたましく往来ゆきざきを呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、昼から夜へ日脚ひあしの淀みに商売あきないの逢魔おうまヶ時どき、一時鳴を鎮めると、出女の髪が黒く、白粉おしろいが白く成る。

優しい声で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方あつちでも、お泊りやす、此方こつちでも、お泊りやす、と愛嬌声の口許は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其処そこへ、突掛つっかけに 紺がすりの汗ばんだ道どうちゆう 中ちゆうを持って行くと、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたしましても……」

何うどして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装みなりを見ての口上に違いないから。

「何だ。無価ただ泊めようと云うのじゃねえのか。」

「外ほかを聞いておくんなはれ。」

「指揮さしずは受けねえ。」と肩を揺つて、のっさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」とまたずつと寄る。

「否いいえ、違いまんの。」

「状ざまあ見ろ、へへん。」

と、半分白い目で天を仰いで、拗ねたようにそのまま素通すどおり。

この辺あたりとて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容子ようすの好い婦人たばが居いて、夕ゆうをほの白く道中を招く旅籠では、風体の恁かくの如き、君を客にはしないのである。

荷にも石いしがわら、瓦わら、古新聞、乃至なにし、懐ふところ中は空からつぽでも、一度目指した軒を潜かづつて、座敷に足さえ踏掛ふんがくれば、銚子を倒し、椀を替え、比目魚ひらめだ、鯛だ、と贅ぜいを言いつて、按摩あんままで取とつて、ぐつすり寝いて、いざ出発の勘定に、五銭の白銅一個ひとつ持たないでも、彼はびくとも為するのではなかつた。

針が一本——魔法でない。

この六ろくでなしの六蔵は、元来腕利きの仕立屋で、女房と世帯しよたいを持ち、弟子小僧も使つかつた奴。酒で崩くづして、賭博ばくちを積み、いかさまの目ばかり装もつた、己おのの名の旅たび双六、花の東あ都ずまを夜遁よにげして、神奈川宿のはずれから、早や旅銭なしの食いつめもの、旅から旅をうろつくこと既にして三年越ごし。

右様みぎようの勘定書に対すれば、洗あつた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織はおりでも、袴はかまでも。何にもなきや経帷子きようかたびらを縫ぬつて遣やら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女おんなどもの顔を剃あつて、虎口ここうを遁のがれた床屋がある。——それから

見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕立は重宝ちようほうで、六の名は七同然しち、融通ゆうずうは利き過ぎる。

尤も仕事もつとを稼とぎためて、小遣こづかいのたしにするほどなら、女房を棄てて流浪なんかしない筈。

からつけつの尻端折しりつぱしより、笠一蓋かさいちがいの着たツ切雀きずずめと云うも恥かしい阿房鳥あほうどりの黒扮装くろいでたちで、二見ヶ浦ねぐらに疍ねぐらを搜して、

「お泊りだ、お一人さん——旅籠は鑿びたでお定りきま、そりや。」と指二本、出女でおんなの目前めさきへぬいと出す。

誰が対手あいてに成るものか、黙もくつて動かす団扇うちあしの手は、浦風を軒のきに誘いつて、背後うしろから……塩し花おぼな塩花。

#### 四

六は門並かどなみ六七軒。

風体と面構つらがまえで、その指二本突出して、二両を二百に値切つても、怒いかつて喧嘩けんかはしな

いけれど、誰も取合うものはなし。

いぎ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指当<sup>さしあた</sup>つて、腹は空く、汗は流れる、咽喉<sup>のど</sup>は乾く、氷屋へ入る仕<sup>し</sup>覚<sup>かく</sup>も無かつた。

すねた顔<sup>つらつき</sup>色、ふてた凶<sup>ずうたい</sup>体、そして、身軽な旅人の笠<sup>かさ</sup>捌<sup>さ</sup>きで、出女の中を伸<sup>の</sup>歩<sup>し</sup>行く、白<sup>しろ</sup>徒<sup>もの</sup>の不敵らしき。梁<sup>りょう</sup>山<sup>ざん</sup>泊<sup>ぱく</sup>の割<sup>わり</sup>符<sup>ふ</sup>でも襟<sup>えり</sup>に縫<sup>ぬい</sup>込んでいそうだったが、晩の旅籠<sup>りゆうろう</sup>にさしかかつた飢<sup>うえ</sup>と疲<sup>つか</sup>勞<sup>れ</sup>は、……六よ、怒るなよ……實際<sup>じつじ</sup>余<sup>よ</sup>所<sup>そ</sup>目<sup>め</sup>には、ひよろついで、途<sup>ち</sup>方<sup>は</sup>に暮<sup>くれ</sup>れたらしく可<sup>あ</sup>哀<sup>われ</sup>に見えた。

この後<sup>ご</sup>を、道<sup>ち</sup>の小<sup>こ</sup>半<sup>はん</sup>町<sup>ちやう</sup>、嬉<sup>こ</sup>し<sup>はん</sup>そうに、おかしそうに、視<sup>な</sup>め<sup>が</sup>視<sup>な</sup>め、片<sup>へ</sup>頬<sup>こ</sup>笑<sup>わ</sup>みをしながら跟<sup>つ</sup>いて歩<sup>ある</sup>行<sup>あ</sup>いたのは、糊<sup>こ</sup>のきいた白<sup>しろ</sup>地<sup>ぢ</sup>の浴<sup>ゆ</sup>衣<sup>かた</sup>に、絞<sup>しぼ</sup>りの兵<sup>へ</sup>児<sup>こ</sup>帯<sup>おび</sup>無<sup>む</sup>雑<sup>ざつ</sup>作<sup>さく</sup>にぐるりと捲<sup>ま</sup>いた、耳<sup>みみ</sup>許<sup>もと</sup>の青<sup>あお</sup>澄<sup>せい</sup>んで見<sup>み</sup>えるまで、頭<sup>かみ</sup>髪<sup>のけ</sup>の艶<sup>えん</sup>のいい、鼻<sup>はな</sup>筋<sup>すぢ</sup>の通<sup>と</sup>つた、色<sup>いろ</sup>の浅<sup>あ</sup>黒<sup>くろ</sup>い、三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>の、すつきりとした男<sup>おとこ</sup>で。何<sup>ど</sup>処<sup>こ</sup>にも白<sup>しろ</sup>粉<sup>こな</sup>の影<sup>かげ</sup>は見<sup>み</sup>えず、下<sup>げ</sup>宿<sup>しゆく</sup>屋<sup>や</sup>の二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>から放<sup>はな</sup>出<sup>りだ</sup>した書<sup>しよ</sup>生<sup>せい</sup>らしいが、京<sup>きやう</sup>阪<sup>ぱん</sup>地<sup>ぢ</sup>にも東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>にも人<sup>ひと</sup>の知<sup>ち</sup>つた、翼<sup>たつ</sup>辰<sup>み</sup>吉<sup>きち</sup>と云<sup>い</sup>う名<sup>な</sup>題<sup>だい</sup>の俳<sup>やく</sup>優<sup>しや</sup>。

で、六<sup>む</sup>が砂<sup>すな</sup>まぶれの脚<sup>あし</sup>絆<sup>ば</sup>をすじりもじつて、別<sup>べつ</sup>荘<sup>しやう</sup>の門<sup>かど</sup>を通<sup>と</sup>つたのと、一<sup>いち</sup>足<sup>あし</sup>違<sup>ちが</sup>いに、彼<sup>かれ</sup>は庭<sup>にわ</sup>下<sup>げ</sup>駄<sup>だ</sup>で、小<sup>せう</sup>石<sup>いし</sup>を綺<sup>き</sup>麗<sup>れい</sup>に敷<sup>しき</sup>詰<sup>め</sup>た、間<sup>あい</sup>々<sup>あい</sup>に、濃<sup>のう</sup>いと薄<sup>はく</sup>いと、すぐつて緋<sup>ひ</sup>色<sup>しき</sup>なのが、やや曇<sup>曇</sup>つて咲<sup>さ</sup>く、松<sup>まつ</sup>葉<sup>ば</sup>牡<sup>ぼ</sup>丹<sup>たん</sup>の花<sup>はな</sup>を拾<sup>ひろ</sup>つて、その別<sup>べつ</sup>荘<sup>しやう</sup>の表<sup>あ</sup>の木<sup>き</sup>戸<sup>ど</sup>を街<sup>まち</sup>道<sup>ぢ</sup>へぶらりと出<sup>で</sup>た。

異は時に、酔ぎましの薬を買いに出たのであった。

客筋と云うのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別懇な親類交際。東に西に興行の都度、日取の都合が付きさえすれば、伊勢路に廻って遊ぶのが習いで、別けて夏は、三日なり二日なり此処に來ない事はないのであった。

今度も、別荘の主人が一所で、新道の芸妓お美津、踊りの上手なかるたなど、取巻大勢と、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜昼なし。

向う側の官営煙草、兼ねたり薬屋へ、ずっと入って異が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯、側対いの淡路屋の軒前に、客待うけの円鬻に突掛つて、六でなしの六蔵が、

(おい、泊るぜえ)を遣らかす処。——考えても——上り端には萌黄と赤と上草履をずらりと揃えて、廊下の奥の大広間には洋琴を備えつけた館と思え——彼奴が風体。

傍見をしながら、

「宝丹はありますか。」

「一寸、ござりまへんで。」

「無い。」

「左様で、ござりません。仁丹が可うござりますやろ。」と夕間暮の葉箆筒に手を掛ける、とカチカチと鳴る環とともに、額の抜上った首を振りつつ大な眼鏡越にじろりと見る。

「宝丹が欲しいんだがね。」

「強い、お生憎様で。」

「お邪魔を。」

「何うだ、姉え、これだけじゃ。」

六は再指二本。

この、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、禪も見える高端折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮つたり、挙げたり、鼻の下を擦つたり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらふらと街道を伸して行くのが、如何にも舞台馴れた演種に見えて、異はうかうか独笑してその後続いたのである。

## 五

やがて一町出はずれて、小松原に、紫陽花の海の見える処であつた。

「君、君。」

何と思つたか、巽がその六でなしを呼んだのである。

「ええ、手前で、へい。」と云うと、ぎっくり腰を折つて、膝の処へ一文字に、つんと伏せた笠の上、額を着けそうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言えば丁寧だが、何とも人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失礼ですがね、何処此処と云つてるよりか、私の許へ泊つちや何うです。」

「へい、貴方へ。」と、俯向けていた地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす気か、汗ばんだか、手の甲で目を擦つて、ぎろりと巽の顔を見た。

「何うです、泊りませんか……ツたつてね、私も実は、余所の別荘に食客と云うわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしない内なんだから、一晚、君一人ぐらい、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へええ、御串戯を。」と道の前後を、苦笑いをしつつ、一寸頭を搔いたは、



扱さては、我が拳ふるまい動うごを、と思つたろう。

「串戯なもんですか。」

其処が水菓子屋の店前で——巽は、別に他に見当らなかつたので、——居合す小僧に振向いて、最もう一軒薬屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言った。

「真個ほんとうだよ、君。」

と笑いながら、……もう向うむいて行きかける六蔵を再また呼んで、

「……今君が通つて来た、あの、旭館と淡路屋と云う大おおな旅館おおきの間にある、別荘に居るんだからね。」

「何ありがてとも難有おほしめしえ 思おぼ召めしで、へい。」

と、も一度笠を出して面つらを伏せて、

「いずれまた……」

「ではさようなら。」

「御機嫌よろしゅう。」

二見ヶ浦を西、東。

思おもいも掛けない親船に、六はゆすぶつた身体を鎮めて、足腰をしゃんと行ゆく。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

と若い女が諸声で、やや色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔別当、白い顔、絞の浴衣が、飄然ひょうりと出て、六でなしを左右から。

「親方。」

「兄さん。」

「ええ、俺おらが事か。兄さん、とけつかったな。聞馴れねえ口を利きやあがる。幾干いくらで泊める。こう、旅籠は幾干だ。」

「否いいえ、宿屋じゃありません。まあ、お掛けなさいな。」

「よう一寸。」

「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」

「何んですよ、そんな事は。」

「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」

「その代りね、今、親方、其処で口を利いたでしょう。」

「一寸、あの方は何と云つて。矢張り普通やっぱの人間とおんなじ口の利き方をなさる事？ 一

寸さあ……」

と衣紋えもんを抜く。

六蔵解よめぬ面の眉しかを擧あげ、

「何だ、人間の口の利き方かただ？……ほい、じゃ、ありや此こ処こ等の稻荷様か。」

「まあ！」

「何だい？」

「あら、名題の方じやありませんか、異さんと云う俳やく優しゃだわよ。」

「畜生め、此こ奴いつら等、道理で騒さわぐぜ。むむ、素顔にやはじめてだ。」

と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿に伸上る。

「可いわねえ。」と、可い厭やな目色めつき。

「黙もつてろ。俺えもこう見みえて江え戸ど兎こだ。異いの仮か声こゝろがうめえんだ。……」

「あら、嬉しい。ひい！」と泣な声こゝろを放はなつたり。

「馳走をしねえ、聞きかして遣やら。二見中の鮑あわびと鯛たうを背し負よつて来きや。熱爛熱爛。」と大手を

ふふつた。

これじゃ頓やがて、鼻唄も出でそうである。

## 六

「もしもし、貴方。」

と媚かしい声。

溝端の片陰に、封袋を切つて晃乎とする、薬の錫を捻くつて、伏目に辰吉のイんだ容子は、片頬に微笑さえ見える。四辺に人の居ない時、こうした形は、子供が鉄砲玉でも買つて来たように、邪気無いものである。

水菓子屋で聞いた薬屋へ行くには、彼は、引返して別荘の前をまた通らねば成らなかつた。それから路を折曲つて、草生の空地を抜けて、まばら垣について廻つて、停車場方角の、新開と云つた場末らしい、青田も見えて藁屋のある。その中に、廂に唐辛子、軒に橙の皮を干した、……百姓家の片商売。白髪の婆が目を光らして、見るなよ、見るなよ、と言ひそうな古納戸めいた裡に、字も絵も解らぬ大衝立を置いた。

宝丹は其処にあつたが、不思議に故郷に遠い、旅にある心地がして、異はふと薄い疲労さえ覺えた。道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたらう。

右から左に弁ずる筈を、こうして手に入れた宝丹は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お薬をめしあがりますなら、お湯か何ぞ差上げますわ。」

唯、片側の一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩色の裙をぼかした、艶なのが、絵の  
ように覗いて立つ。

黒髪は水が垂りそう、櫛巻の房りとした、瓜核顔の鼻筋が通って、眉の恍惚した、  
優しいのが、中形の浴衣に黒縹子の帯をして、片手、その格子に掛けた、二の腕透いて  
雪を欺く、下緊の浅葱に挟んで、——玉の葱の茶室を起った。——緋の袱紗、と見えた  
のは鹿子絞の撥袋。

片手に象牙の撥を持ったままで、巽に声を掛けたのである。

薬の錫を持ったなり、浴衣の胸に掌を当てて、その姿を見たが、通りがかりの旅人に、  
一夜を貸そうと云った矢先、巽は怪む気もしないで、

「恐入りますな。」

「さあ何うぞ。」

と云って莞爾した。が、撥を挙げて鬘を隠すと、向うむきに格子を離れ、細りした襟  
の白さ、撫肩の媚かしさ。浴衣の千鳥が宙に浮いて、ふっと消える、とカチリと鳴る…

…何処かに撥を置いた音。

すぐに、あがりがまち上 框へすつと出て、柱がくれの半身で、つまさき爪尖がほんのりと、とこなつ常夏淡く人を誘う。

巽は猶なむがま関わず格子を開けた。

「じゃあ御免なさいよ。」

と、土間に釣った未だ灯を入れない御神燈に蔦の紋、つるさわみやとし鶴沢宮歳とあるのを読んで、ああ、お師匠さん、と思う時、名の主は…早や次の室まの葭戸越、よしどごし背姿うしろすがたに、うつつ薄りと鉄瓶の湯気をかけて、ひとつところ一 処 浦の波が月に霞んだようであつた。

「恐入ります。」

おんな婦は声を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙つて白湯を注いでいる。

「拝借します。」

と巽は其処の上框へ。

二つ三つ、すらすらと畳触り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越に、しな撓うような膝を支いて、框の隅の柱を楯に、少し前屈みに身を寄せる、としゆす繻子の帯がキクと鳴る、心の通う音である。

「温湯ぬるまゆにいたしましたよ、水が悪うございますから。」

「……御深切ごしんせつに。」

取った湯呑は定紋着じようもんつき、葛を染めたが、黄昏に、薄りと蒼あおすむと、宮歳の白魚しらおの指に、撥袋の緋が残る。

「ああ、私。」と、ばらりと落すと、下棲の端にちらめいて、瞼まぶたに颯さつと色を染めた、二十三四えんが艶かななる哉。

## 七

「私、何うしたら可いいでしょう。極きまりが悪うござんすわ。」

と婦おんなは軽く呼吸いきを継いで、三味線みすじの糸を弾くが如く、指を柱に刻みながら、

「私、お知ちかづき己こでもないお方をお呼び申して、極きまりが悪いものですから、何ですか、ひとりで慌あわてしまつて、御茶台にも気が付きません。……そんな自分の湯呑でなんか。……失あやま礼れいな、……まあ、何うしたら可いうございましょうね。」

と襟を圧おさえて俯向うつむいて、撥袋を取つて背後うしろに投げたが、留南奇とめぎの薰かほが颯さつとして、夕暮の

奇しき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難有う。そしてお師匠さん。貴女の芸にあやかりましょう。」

「存じません。」

と、また一刷毛臉を染めつつ、

「人様御迷惑。蚊柱のように唸るんでございますもの、そんな湯呑には子子が居ると  
不可ません。お打棄りなさいましよ。唯今、別のを汲替えて差上げますから。」と片手  
をついて立構す。

辰吉は圧えるように、

「ああ、しばらく。貴女がそんな事をお言いなすつちや私は薬が服めなく成ります。この  
図体で、第一、宝丹を舐めようと云う柄じやないんですもの。鯨や鯨と掴合つて、  
角丸を棒で嚙ろうと云うまじろすじやありませんか。」

婦が清い目で、口許に嬉しそうな笑を浮べ、流眊に一寸見て、

「まあ、そうしてお商売は、貴方。」

「船頭でさあね。」



「一寸！ 池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす……」

お師匠さんは御存じだ。

「雑と、人違いですよ。」と眦を伏せてぐつと呑んで、

「申兼ねましたが、もう一杯。丁ど咽喉が渴いて困っていた、と云う処です。」

艶なお師匠さんは、いそいそして、

「お出ばなにいたしましたようね。」

「薬を服みました後ですから、お湯の方が結構です——何ですか、お稽古は日が暮れてからですか。ああ、いや、それで結構。」

辰吉は錆のある粹な笑で、

「ははは、些と厚かましいようですな。」

「沢山おっしゃいます。——否、最う片手間の、あの、些少の真似事でございます。」

「お呼び申せば座敷へも……？」

「可厭でございますねえ、貴方。」

と片手おがみの指が撓って、

「そんな御義理を遊ばしちや、それじゃ私申訳がありません。それで無くってさえ、お通

りがかりをお呼び申して、真個ほんどうに不躰ぶしつけだ、と極りが悪うございましてね、赫々かつかつ逆上のぼせますほどなんですもの。」

身を恥じるように言訳がましく、

「実は、あの、小婢こしもを買ものに出しまして、自分でお温習やどいでもしましうか、と存じました処が、窓の貴方しのぶ、葱の露しづの、大きな雫が落ちますように、螢が一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ……」

「螢。」

と巽は、声に応じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。それとも一ツ星の光るお姿か知ら、とそう思つて立つたんですが、うっかり私、撥なんか持つて、螢だったら、それで叩きますつもりだったんでしうかねえ。そんな了簡で、螢なんて、蜻蛉とんぼか蝙蝠こうもりで沢山でございませう。」

蜻蛉は寝たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠が、べかこ、と赤い舌を出して、

「これは御挨拶だ。」

と翻然ひらりと行る。

## 八

「それですから、ふつと、その格子を覗きました時は、貴方の御手の御薬の錫をば、あの、螢をおつかまえなすつた、と見ましたんですよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌に据えて熟と視た。

「まあ、お塩梅が沢山悪いんじゃないやありませんか、何しろお上りなすつて、お休みなさいましたら何うでしょう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄つて案じ顔。

巽は眉の凜とした顔を上げて、

「否、気分は初めから然したる事も無いのです。宝丹は道楽に買った、と云つて可いくらいなんですが。」

爾時、袂へ突込んで、

「今の、螢には、何だか少し今度は係合がありそうですよ——然うですか、螢を慕つてお師匠さん、貴女格子際へ出なすつたんだ。」

「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕つて、と云う柄じやありません。」

「まあまあ……ですがね、私が宝丹を買いに出たはじまりが、矢張り螢ゆえに、と云つたような訳なんですよ。ふつと、今思出したんです……」

「へええ。」と沈んだような声で言う、宮歳は襟を合せた。

「今度、当地こちらへ来ます時に、然うです。興津……東海道の興津に、夏場遊んでる友だちが居て、其処へ一日寄つたもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの駅から上りに乗つたんですよ、右の船頭が。」

「……はあ、可ようございます。ほほほ。」と笑わらいが散らぬまで、そよそよ、と浅葱の団扇の風を送る。指環の真珠が且かつ涼しい。

「頂戴しますよ。」

と出してあつた薄お納戸の麻の座蒲団をここで敷いて、

「小さな革靴一つぶら下げて、プラットホームから汽車の踏段を踏んで、客室の扉を開けようとする、ほたりと。」

巽は口許の片頬おきを圧おさえて言つたのである。

「虫が来て此処へ留つたんです、すつと消きえ際しなの弱い稲妻か、と思ひました。目前に光つ

たんですから吃驚して、邪険に引払うと、最う汽車が動出す。

妙にあとが冷つくのです、濡れてるようにね、擦つて見ても何ともないので。

忘れていると、時々冷い。何か、かぶれでもしやしないかしら、螢だと思つたものの、それとも出合頭に、別の他の毒虫でもありはしないかと、一度洗面台へ行つて洗いましたよ。彼処で顔を映して見ても別に何事もありません、そのうちに紛れてしまふ。それでも汽車で、うとうとと寝た時には、清水だの、川だの、大な湖だの、何でも水の夢ばかり切々に見ましてね、繋ぎに目が覚める、と丁ど天龍川の上だったり、何処かの野原で、水が流れるように虫の鳴いてた事もありましたがね。最う別に思出しもしないで、つい先刻までそれ切りで済んでいました。

今しがたです……

池川さんの、二階で、

と顔を見合せた時、両方で思わず頷く様な瞳を通わず、ト圧えた手を膝にして巽はまた笑を含んで、

「……釣舟にしておきましょう、その舟のね、表二階の方へ餉台を繋いで、大勢で飲酒ながら遊んでいたんですが、景色は何とも言えないけれど、暑いでしょう。この暑さと

云つたら暑さが重石おもしに成つて、人間を、ずんと上から圧おしつ付けるようです。窓から見る松原の葭簀茶屋よしずと酸漿提灯ほおすきちようちんと、その影がちらちら砂こぼに溢れるような緋色の松葉牡丹ばかりが、却つて目に涼しい。海が焼原に成つて、仕方がない、それじゃ生命も続くまいから、陸おかの方の青い草木を水にしておけ、と天道てんとうの御情けで、融通をつけて下さる、と云つた陽気ですからね。」

「まあ、随分、ほほほ、もう自棄やけでございますわね、こんなに暑くつちや。」  
その癖、見る目も涼しい黒髪。

## 九

「些ちつとでも涼しい心持に成りたくツて、其処等の木の葉の青いのを熟じつと視ていて、その目で海を見ると、漸やっと何うやら水らしい色に成ります。

でないと真赤ですぜ。日盛ひざかりなんざ火が波を打っているようでしょう。——さあ、然うなると不思議なもので今も言つた通りです。潮煮うしおの鯛の目、鮑の蒸したのが涼しそうで、熱爛の酒がヒヤリと舌に冷いくらい——貴女が云つた自棄やけですか——

夕方、今しがた一時は、風の絶頂で口も利けない。餉台を囲んだ人の話声を、じりじりと響くように思つて、傍目も触らないで松原の松を見ていて、その目をやがて海の上にくう返すと、「

異は目を離して指したが、宮歳の顔を見て、鑢びた声して低く笑つた。

「はははは、ベツかつこをするんじやありませんよ——。然うすると、海の色が朝からはじめて、颯と一面に青く澄んで、それが裏座敷の廻縁の総欄干へ、ひたひたと簾を流すように見えましてね、縁側へ雪のような波の裾が、すつと柔かに、月もないのに光を誘つて、遙かの沖から、一よせ、寄せるような景色でした。

悚と涼しく成ると、例の頬辺が冷りとなりました、螢の留つた処です。——裏を透して、口の裡へ、真珠でも含んだかと思う、光るように胸へ映りました。」

敷居に凭れかかり、団扇を落して聞いていた婦人は、膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可厭な心持じやなかつたんです——それが、しかし確に、氷を一片、何処かへ抱いたように急に身を冷して、つるつると融るらしく、脊筋から冷い汗が流れました。香がします、水のような、あの、螢の。」

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたように、フイと席を立てて戸外へ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかかったようには、暮れてはいません。」

名所図絵にありそうな人通りを見ていると、最う何もかも忘れしました。が、宝丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今この螢のお話で、無遠慮に御厄介に成りました。申訳にもと、思いますから、——私も、無理に附着けたらしいかも知れませんが、螢の留ったお話をしたんです。」

と半ば湯呑のあとを飲むと、俯目に紋を見て下に置いた。彼は帰りがけの片膝を浮かしたのである。

唯、呼吸を詰めて、

「貴方。」

「え。」

余り更まつた婦の氣に引入れられて驚いた体に沈んで云った。

おんな  
おんな  
婦は肩を絞るように、身をしめた手を胸に、片手を肱に掛けながら、

「螢じゃありませんわ。螢じゃありませんわ。」



「何がですえ。」

「そりや、あの……何ですよ、屹きつと……そして、その別荘のお二階へ、沖の方から来ましたつて、……蒼い、蒼い、蒼い波は。」

柱の姿も蒼白く、顔の色も倅おもかげだ立たつて、

「お話を伺いますうちにも、私は目に見えますよう。そして、跡を、貴方の跡を追つて浪打際が、其処へ門まで参つているようですよ。」

と、黒縹子の帯の色艶やかに、夜を招いて伸のび上ある。

白い犬が門を駈けた。

辰吉は腰を掛けつつ、思わず足を爪立てた。

## 十

「貴方、その欄干にかかりました真ま蒼つさな波の中に、あの撫とこ子こなつの花が一束流れますような、薄い紅色の影の映つたのを、もしか、御覧なさはしませんか。」

……と云う、瞳の色の美しさ、露を誘つて明あいかるまで。その色に誘われて、婦おんなが棄なてた撥

袋の鏡台の端に掛つたのを見た。

我にもあらず茫ぼうと成つて、

「彼処あそこに見える……あれですか。」

「否いいえ、あんなものじゃありません。」とやや氣組きぐんで言う。

「それでは?……」

「否いいえ、縞ろの色なんです。——あの時あの妓ひと——は緋の長襦袢を着ていました。月夜のような群青に、秋草を銀で刺繡ぬいとりして、ちらちらと黄金の露を置いた、薄いお太鼓をがつくりとゆるくして、羅うすものの裾を敷いて、乱次しどけなさつたら無い風で、美しい足袋たびはだし跣足で、そのままスツと、あの別荘の縁を下りて、真直まっすぐに小石の裏庭を突切つつきると、葉のまばらな、花の大きなのが薄化粧して咲きました、」と言う……

大輪の雪は、その棲を載せる翼であつた。

「あの、夕顔の竹の木戸に、長い袂も触れないで、細ほつそりと出たでしょう。……松の樹の下を通る時は、遠い路を行くようでした。舟の縁へりを伝わると、あれ、船首みよしに紅い扱帯しごきが懸る、ふらふらと蹠踉よろけたんです……酷く酔っていましたわね。

立直つた時、すつきりした横顔に、纏もつれながら、島田鬘しまだも姿も据すわりました。

私はその時、隣家の淡路館の裏にあります、ぶらんこを掛けました、柱の処で見ていたんですよ、一昨年ですわね、——異さん。」

と、然も震を帯びた声で、更めて名を呼んで、

「貴方に焦れて亡く成りました、あの、——小雪さん——の事です。」

実に、それは、小雪は伊勢の名妓であった。

辰吉は、ハツと気を打って胸を退いた。片膝揚げつつ框を背後へ、それが一浪乗って揺れた風情である。

棲に曳いたも水浅葱、団扇の名の深草ならず、宮歳姿も波に乗ってぞ語りける。

「不思議ですわね、あの時、海が迎いに来て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠れました。蹴出しの棲に、藍がかかって、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。」

其処に唯一人、あの妓が立ったんです。笄がキラキラすると、脊の婀娜とした、裾の色くれないの紅を、潮が見る見る消して青くします。浪におされて、羅は、その、あの蹴出しにしつとり離れて、取乱したようですが、ああした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の浜に、緋の袴で居るようでした。」

——驚破泳ぐ、とその時、池川の縁側では大勢が喝采した。——

「あれあれ渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅のそのまんま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思うのに、錦の帯の結目が颯と落ちて、夢のような秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のように散ったんです。

まあ、顔が真蒼、と思うと、小雪さんは熟と沖を凝視めました、——其処に——貴方のお頭と、真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！

貴方は泳いで在らしたんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知った芸者たちも五六人、ばらばらと浜へ駈けて出る。中には舫つた船に乗って、両手を挙げて、呼んだ方もござんした、が、最うその時は波の下で、小雪さんの髪が乱れる、と思う。海の空に、珠の簪の影かしら、晃々一ツ星が見えました。」

「その裸体はだかなのは別荘の爺やさんでございましたってね。」

「さよう治平と云う風呂番です。」と言いながら、異おもてめんの面は面の如く瞳が据った。

灯ともしなき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋の白張しらはりに髻髻ほうふつする。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を掻くように、足搔あがいて、波を分けて追掛けましたわね。

丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでなさいます——

あとで、貴方がお話しなすつたって……あの、承りましたには、仰向けに成つて、浪の下の小雪さんが、……嘸さぞ苦しかったでしょう、乳を透して緞の紅い、其処の水が桃色に薄うすりと搦からんでいる、胸を細く、両手で軽く襟を取つて、披はたけそうにしていたのが、貴方がその傍にお寄りなさいました煽りに、すつと立つて、鬻ゆに水をかぶつていて、貴方の胸へ前髪をぐつちより、着つけました時、あの、うつくしい白足袋が、——丁ど咽喉のどの処へ潮を受けてお起ちなすつた、——貴方の爪先へ、ぴたりと揃った、と申すじゃありませんか。」

異は框をすつくと立つた！

「……吃驚びっくりなすつて、貴方は、小雪さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたってね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一斉いっせきに飲むような気がします。」と云う顔も白澄むの

である。

「其処を爺さんが抜切つて、小雪さんを抱きました。ですけれども、最うその時、あの妓ひとの呼吸いきは絶えていたのです——あの日は、小雪さんは、大変にお酒を飲んでいたのでね、茶碗で飲んで、杯はい洗せんまであけたんだそうですね。深酒の上に、急に海へ入つたもんですから、血ちまが留とまつてしまつたんでしよう。

そして、死体に成つてから、貴方のお胸むねに縫すがりつ着ついたんじゃありませんか、海の中で、と膝ひざを寄せる、褌おんなが流れて、婦おんなは翼おんなの手を取つた。

指ゆびが触ると、掌おんなに、婦おんなの姿うなじは頸うなじの白い、翼おんなの青い、怪しく美しい鳥が留とまつたような気がして、翼おんなの腕うでは萎しぼえたる如く、往ゆき来きに端はし近ぢかな処かに居ゐながら、振ふ払はうことが出来なかつた。……四辺あたりを見ると、次の間の長火鉢ながひばちの傍そばなる腰窓こしどの竹たけを透すいて、其処そこが空地くうちらしく幻まぼろしの草くさが見みえた。

「巽たかしさん。」

「……………」

「あの、風呂番ふろばんの爺おやさんは、そのまま小雪こゆきさんを負おぶい返かへして、何なにしろ、水浸みづひしなんですから、すぐにお座敷ざしきへは、とそう思おもつたんでしよう。一度、あの松まつに舐もつた、別荘べつしやうの船ふねの中

へ抱下だきおろしましたわね。雫に浜も美しい……小雪さんの裾を長く曳いた姿が、頭髪かみから濡れてしおしおと舷ふなべりに腰を掛けました。あの、白いとも、蒼いとも玉のように澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻ほっと息が出ようと、誰も皆思つたのが、一呼吸ひといきの間もなしにバツタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。

お浴衣じやありませんでしたけれど、其処みおびにお帯と一所に。」

と婦おんなは情に堪えないらしく、いま、翼の帯に、片頬じつを熟と。……一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。婦おんなの一念……最もうそれですもの。……螢はお迎むかいに行つたんですよ。欄干らんかんにかかりました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢あいに来たんです。

不便ふびんとお思おもいなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死しにをしたんです。

素振そぶり、気振けぶりが精一杯、心は通わしたでしょうのに、普通なみの人より、色も、恋も、百層倍、御存ごぞんじの貴方あなたでいて、些ちつとも汲くんでお遣ちかんなさらない！——否いいえ、小雪さんの心は、よく私わたしが存ぞんじております。——

俺おれは知らない、迷惑めいわくだ、と屹きつと貴方あなたは、然そうおつしやいませうけれど、芸妓つとめしたつて、

女ひとですもの、分けて、あんな、おとなしい、内気な小雪さんなんですもの、打ちつけに言  
出せますか。

察しておいで遊あそばしながら、——いつも御お鼻び頂ていを受けていましたものですから、池川さ  
んの、内証おきこいりの御お寵けい妓ぎでもあるようにお思いなすつて、その義理で、……あれだけに焦  
れたものを、かなえてお遣つかんなさらない。……

堅か気ねはそうじやあござんすまい、こうした稼は業なの果は敢かい事ねは、金か子ねの力ちからのある人には、  
屹きつと身みを任まかせている、と思おもわれます。

御酒の上のまま事には、団扇と枕を寝かしておいて、釣手を一ツ貴方にまかして、二人  
で蚊帳も釣りましたものを。」……と言う。

その蚊帳のような、海のような、青いものが、さらさらと肩にかかる、と思うと、いつ  
か我身はまた框かまどに掛かけつつ、女の顔かほが弗ふと浮ういて、空そらから熟じつと覗のぞいたのである。

## 十二

「これが俳やくしや優うなの。」



「まあ。」

しよろしよろ、浪が颯なぶるような、ひそひそと耳に囁く声。

松原の茶店の婦おんなの、振舞酒に酔い痴れて、別荘裏なる舫船ふんぞに鼻唄で踏反ふんぞつて一寝入りぐツと遣つた。が、こんな者に松の露は掛るまい、夜気にこそぐられたように、むずむずと目覚めた六蔵。胴の間に仰向けで、身うちが冷える。唯と、野宿には心得あり。道中笠を取つて下腹あてへ当がつて、案山子かかしが打倒ぶつたおれた形でいたのが。——はじめは別荘の客、巽辰吉が、一夜の宿をしようと云つた、情ある言ことばを忘れず、心に留めて、六が此処に寝たのを知つて、（船ふねに苦こを葺ふいてくれるのじゃないか。）と思つた。

舷ふなばたへ、かたかたと何やら嵌込はめこむ……

その嵌めるものは、漆塗の艶やかな欄干のようである、……はてな、ひそめく声は女である。——

うまれながらにして大好物。寝た振でいて目を働かすと、舷ふなばたに立かかつて綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、その貝の口を細く開いた奥に、白銀しろがねの朧なる、たとえば真珠の光があつて、その影が、幽かすかに暗夜やみよに、ものの形を映出うつしだす。

「芸妓が化けたんだ、そんな姿で踊でも踊っていたろう。」

時に、そんなのが一個ではない。左舷の処にも立っている。これも同じように、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、と響く。

外にもまだ居る……三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭礼の揃かな、蛤提灯——こんなのに河豚も栄螺もある、畑のものじゃ瓜もあら……  
茄子もあら。」

但しその提灯を持っているものの形は分らぬ。が、蛤の姿である……と云うのが、衣服、その袖、その帯と思う処がいずれも同じ蛤で、顔と見るのが蛤で、目鼻と思ひ、口と思ひ、口と思ひ、そして灯が蛤である。

襟か袖かであるらしく、且つ暗の綾の、薄紫の影が籠む。

時にかたかたと響いて、二三人で捧げ持った氣勢がして、婦の袖の香立蔽い、船に柱の用意があつて、空を包んで、トンと据えたは、屋根船の屋根めいて、それも漆の塗の艶、星の如き唐草の蒔絵が散つた。左舷右舷も青貝摺。

六蔵は雛壇で見て覚えのある車のような、と偶と思ふ。

時に、蛤が口を開いた。否、提灯が、真珠の灯を向けたのである、六の顔へ——そして

女の声で言った。

「これが俳優なの？」

「まあ。」

「醜い俳優だわね。」

——ままにしろ、此奴等——と心の裡で、六歳は苦り切る。

「まだ、来ていやしまいと思つたのに、」

「そして、寝ているんだもの、情のない。」

「心中の對手の方が、さきへ来て寝ているなんて。」

「ねえ、」

と応じて、呆れたように云つた、と思つと、ぎつと浪が鳴つて、潮が退いたらしく寂  
寞する。

欄干も、屋根も、はつと消えて、蒔絵も星も真の暗闇。

直ぐに、ひたひた、と蹙音して、誰か舷へ来たらしい。

透通るような声が、露に濡れて、もの優しい湿を帯びつつ、

「……巽さん。」

途端に、はつと衣の香と、冷い黒髪の薫かおりがした。

「ああれ、違つて……違つているよう。」

### 十三

蛤の灯がほんのりと、再来またて……

「お退どきよ、退どいておくれよ。」

「よう、お前。」

と言う。……人をつけ、蛤なんぞに、お前呼ばわりをされる兄あにい哥いでないぞよ。

「此処は、今夜用がある。」

「大事の処なんだから。」

「よう。」

「仕ようがない。ね、酔よつぱらつて。」

「臭くい事。」

「憎らしい、松葉で突つついて遣つりましょう。」

敏捷い、お転婆なのが、すつと幹をかけて枝に登った。呀、松の中に蛤が、明く真珠を振向ける、と一時、一時、雨の如く松葉が灌ぐ。

「お、痛。」

「何うしたの。」と下から云う。

松の上なが、興がった声をして、

「松葉が私を撥るわよ、おほほ、おほほ。」

「わはは。」と浜の松が、枝を揺つて哄と笑う。

「きやつ。」と我ながら猿のような声して笑つて、六蔵はむつくと起きて、

「姉等、仕立ものの用はねえか。」と、きよとんとして四辺を視た。

浅葱を翻す白浪や。

燃ゆるが如き緋の裳、浪にすつくと小雪の姿。あの、顔の色、瞳の艶、——恋に死ぬ身

は美しや、島田のままの星である。

蛤が六つ七つ、むらむらと渚を泳いで、左右を照らす、真珠の光。

凄じいほど気高い顔が、一目、怨めしそうに六蔵の面を視て、さしうつむいて、頸白く、羅の両袖を胸に犇と搔合す、と見ると浪が打ち、打ち重つて、裳を包み、帯を消し、胸

をかくし、島田鬻の浮んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とてそのまま沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、真蒼まっさおに光る、と見る、とこの小舟は揺上つて、松の梢に、ゆらりと乗るや、尾張を越して富士山が向うに見える、六蔵すてつべん素天辺すてつべんに仰天した。

這奴横紙しやつを破つても、縦に舟を漕ぐ事能わず、剩あまつさろえ櫓ろ櫓かいもない。

「わああ、助けてくれ、助たすけ船ぶね。」

「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜やみよを宮歳と二人で来た、巽は船のへりに立つと、突いきなり然跳起きて大手を拵げて、且つ船から転がり出した六蔵のために驚かされた。

菩提所の——巽は既に詣ではしたが——其処ではない。別荘の釣舟は、海に溺れた小雪が魂をのせた墓である。

「小雪さんを私と思つて。」……

あの、船で手を取つて、あわれ、生命掛けた恋人の、口ずから、切せめて、最いと愛としい、と云つて欲ほしい、可哀相とだけでも聞かし給え。

御神燈は未だ白かったのに、夜の暗さ、別荘の門、街道も寝静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよい手に、辰吉は袖を引かれて来たのであった。

「へい、仕立ものの御用はねえかね。」

きよろん、とした六歳より、異が却って茫然とした。

宮歳の姿は、潮の香の漾ただよう如く消えたのである。

別荘の主人池川の云うのには、その宮歳は、小雪と姉妹のように仲のよかつた芸妓である。

内証ながら、山田の御師、何某なにがしにひかさされて、成程、現に師匠をしている、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云う処なまめに媚かしく、意気である。

言語道断、昨夜急ゆうべに二見ヶ浦へ引越して来る筈はない！

扱さて翌朝の事であった。

電話で、新道の一茶屋へ、宮歳の消息を聞合せると、ぶらぶら病で寝ていたが、昨日急に、変へんが変かわつて世を去つた。

——写真を抱いていましたよ、死際に薄化粧して……異さんによろしく……——  
その時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍であった。

簾に寄る白浪は、雪の降るより尚お冷い。

その朝、六蔵も別荘の客の一人であつた。が、お先ばしりで、衆ひとと一いつしよ所に、草の径こみちを、幻の跡を尋ねた——確に此処ぞ、と云う処に、常夏がはらはら咲いて、草の根の露に濡れつつ、白檀の蒔絵の、あわれに潮にすさんだ折櫛が——その絵の螢が幽こもりに照てつた。

松に舫あはつた釣舟は、主人あるしの情なさけで、別荘の庭に草を植え、薄、刈かる萱かや、女おみなえし郎花、桔きき梗ようの露に燈籠を点して、一つ、二見の名所である。

(『新小説』一九一六「大正五」年四月号)



# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」ちくま文庫、筑摩書房

2009（平成21）年7月10日第1刷発行

初出：「新小説」

1916（大正5）年4月号

※「一寸」に対するルビの「ちやと」と「ちよつと」の混在は、底本通りです。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 浮舟

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>